
緋弾のARIA —純色の鎧を纏いし者—

YAKT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア ―純色の鎧を纏いし者―

【Nコード】

N9554V

【作者名】

YAKT

【あらすじ】

武偵を育てる高校、武偵高。東京武偵高の教務科に御行萩矢という教師がいた。普段は全然頼りない気弱そうな教師だが、裏の顔はある組織を追い、純色の鎧を纏う者であった。そんな彼が、神崎・H・アリアに目をつけられた時、物語が動き出す――。

プロローグ（前書き）

初小説です。書こうかなと前から思っていました。ついに投稿しました。

よろしくお願いします！

プロローグ

—— 東京・あるビルの屋上
そこに一人の男が立っていた。

『おい、出たぞ』

「ああ、分かっている」

その男の視線の先には夜の東京が広がり、色とりどりの光が街を照らしていた。

しかし男が見ていたのはそんな光が届かなく、チカチカと小さく光が瞬いてる—— 銃撃戦が起こっている場所を見ていた。

時代が進むにつれ犯罪は凶悪化していった。

これに対抗し武装を許可され、荒事を有償で解決するなんでも屋—— 武装探偵、通称“武偵”ができた。

今銃撃戦が起こっている場所でも武偵、制服を着ているところから武偵高校の生徒が数人物陰に隠れていた。

『完全に押されているな。数、実力ともに奴らが勝っている。おまけにあいつらはもう残弾数も少ないだろう』

「・・・応援はどのくらいかかる？」

『早くてもあと20分。その間に全滅するな』

「全滅なんてさせやしない」

そう言って男はビルの屋上から銃撃戦が起きている場所に向かって飛び降りて行った。

最後の弾倉を挿し替えながら彼女、東京武偵高2年強襲科^{アサルト} 逢月アルドラーゼは焦っていた。

難しい依頼ではなかった。

麻薬取引の現場を押さえる。

事前に情報科^{インフォルマ}から取引に来るのはヤクザが4人程度との報告だった。突入してすぐに制圧したと思いきや、何処からか敵の増援が現われた。

増援の予想はしていたが、動きが普通じゃない。

ただのヤクザの動きではない、相当な訓練を受けた兵士だ。

あっという間に仲間是被弾し、囲まれつつある。

絶体絶命。

まさにその言葉通りに。

「こんなところで死ぬわけには・・・」

動けるのは自分だけ、こうなったら捨て身覚悟で反撃しようとしたが、仲間から止められてならどうするかを相談してた時、ある異変に気が付いた。

銃声は聞こえるが銃弾がこっちに来ない。

先程まで感じられた敵の気配も無くなっている。

彼女の銃、黒一色のM92Fベレッタを構えながら物陰から出てみると、そこにあっただのは倒れている敵の姿だった。

（これは一体・・・？）

倒れている敵を観察すると全員死んではおらず、気絶している。

出血が見られない所から、打撃によって気絶させられたと考えられた。

一体何が起きた・・・そう思った時。

近くで人が倒れる音が聞こえた。

すぐに音のした方にベレッタを向けたが、目にした光景に驚愕した。

そこには2人の人がいた。

1人は自分達を襲ってきた敵だが今は地面に伏していて動いていない。

そしてもう1人、そっちの方に目がいった。

その姿は特撮ヒーローのようで全身に黒、いやよく見ると濃い灰色のアーマーのような物を付けており、その間から防弾ベストらしきものが見える。

見たところ武器らしきものは持っていない。

多分こいつが全て倒したのだろう、そう直感で感じた。

そいつはフルフェイスヘルメットのようなバイザーからこっちを見ただかと思ったら、背を向けて立ち去ろうとしている。

「ま、待て！ おまえは誰だ！？」

ようやく我に返り慌てて尋ねていた。

そいつは歩みを止めず背を向けたまま夜の闇に消えていった。

その間銃を構えたまま動くことができなかった。

数分後、武偵高からの応援が到着し事件は終結した。

謎の存在を残して・・・

ブログ（後書き）

YAKT「ついに始めてしまった・・・。どうなることやら」

?「しゃきつとしろ！もう遅いんだよ！！」

Y「でも不定期更新になるよ」

?「そんな時はそんな時だ。つーか、なんで俺は「？」なんだ！？」

Y「まだちゃんとでてないから」

?「はあ！？」

Y「今日はここまで。また次回に！」

1 時間目 始業式にて

「ふぁ・・・」

東京武偵高校。

レインボーブリッジの南に浮かぶ南北およそ2キロ・東西500メートルの長方形をした人工浮島の上にある学校だ。
今日は武偵高の始業式の日である。

そんな始業式で欠伸をしている眼鏡をかけた教師がいた。

「ご、御行先生。始業式中ですよ！生徒の前で欠伸をしないで下さい！」

「す、すみません・・・」

インゲスタ
探偵科の教師、高天原ゆとり先生から注意を受けているのは去年から教師になった、この俺、御行萩矢である。

「なんや御行、徹夜か？」

「ええ、まあ・・・ふぁ」

「しゃきつとしろ、しゃきつと！」

バシバシ！！

この大声で人のことを叩いているのは強襲科アサルトの蘭豹である。

香港マフィアの愛娘で人間バンカーバスターのあだ名をもつ鬼教官。ちなみに背は向こうが上だが歳はこっちが上だ。

今壇上では生徒会長の星伽白雪の話が終わり、武偵局のお偉いさんがありがたーいお話をしている。

教師としてちゃんと聞かなきゃいけないのだが、睡魔のせいではほとんど聞いていなかった。

ついに睡魔が限界に達しそうな時だった。

『おい、御行。面白い事が起きてるぞ』

突然頭に声が聞こえた。

だが周りにはその声は聞こえていない。

俺の耳にはイヤホンも何もついていない。

（何だ、ジューダス？）

今度は俺が口を開かず返答する。

これも周りに聞こえていない。

この会話は超能力の類いではなく、骨伝導スピーカーを眼鏡のフレームに内蔵しており、振動によって会話をしている。

こんな物を持っているのは俺が装備科アムドの教師であり、自分で作ったからである。

他にも機能があるが今は置いておこう。

『聞いて驚け、世にも珍しいチャリジャックが起きてるぞ』

（・・・なんでチャリジャックなんだ？）

『反応が薄いな、まあいい。理由は簡単だ、UZIを取り付けたセグウェイがチャリをずっと追いかけている』

（UZIを付けたセグウェイか・・・面白いな）

『面白いのはここからだ。チャリジャックにあっているのは遠山キンジだ』

遠山キンジの名前を聞いた時、俺は初めて東京武偵高に來た日を出していた。

その日はちょうど入試の日であり、強襲科の試験で抜き打ちで教官が参加する中に俺がいた。

なぜ來たばっかの新人教師がこんなことをしているかといえば、単になんとなくという答えが返ってきた。

解せん。

まあ、新人なのでやれと言われたらやるしかないのだが。

俺は装備科の教師だから大したことないと他の教官から思われるみたいだったが、さすがに中学生に負けることはない。

だが・・・

「どうしてこうなった」

今俺の目の前には床がある。

自分がやられたと分かったのは、他の教官が中学生に倒されていくのを見てからだった。

遠山キンジに。

完全に油断したな、あの時は。

その後いろいろ調べて状況などからあいつが特異体質——ヒステリア・サヴァン・シンドロームであることが最近分かった。

『御行、こいつは《武偵殺し》の可能性が高い』

（《武偵殺し》・・・ということは爆弾が仕掛けられてるな）

ジューダスに現状を聞き、これは遠山も死んだなと考えていると

『ア、アリア!!』

(何?)

アリアといったら、去年の3学期に転校してきた神崎・H・アリアのことか?

(おい、ジューダス)

『スゲーぞ!パラグライダーからの二丁拳銃の水平撃ちでセグウェイを破壊!さらにそのままキングジの野郎を救出しちゃった!!』

そいつはすごいな。

実況を聞くだけでも難易度の高さが半端ない。

(ジューダス、撮っているか?)

『当然だ。こんなもん、滅多に見られんからな』

ちょうどその時、始業式が終わった。

俺は救出劇の映像を見る為に自分の部屋に戻っていった。

1 時間目 始業式にて（後書き）

ジューダス『やっと俺の名前がでたな』

YAKT『そーだね』

ジ『まだちゃんとアリアあつてないな』

Y『一応転校してきた時にあつてゐる事にしてゐる』

ジ『早く会いたいな』アリアちゃんに』

Y『え？』

2 時間目 考察

教務科の自分の部屋で御行は、アリアの救出劇の映像をパソコンで見っていた。

「映像で見るとよりすごいな」

今俺が見ている映像は、チャリジャックでキンジが通ったルートの近くにある監視カメラをハッキングして撮ったものだ。

『スゲーもんだな。あんな不安定な体勢から正確な射撃をしている』

そこはさすがの強襲科のSランク武偵といったところか。

『そしてここだ。まさか逆さ吊りの姿勢で救出するとは。にしてもキンジの野郎・・・なんて羨ましい野郎だ』

何言っただこいつはと思っていると、映像のアリアとキンジは爆発で吹っ飛ばされ、画面の外に消えてしまった。

「ここまでか」

『いや、《シャドー》で続きは撮ってある』

「おまえ、また勝手に」

そう言っただけで御行は窓の近くにあるプラモデル——否、これは無人二足歩行恐竜型ロボット《シャドー》を見た。

これも御行が作製したもので、高性能カメラや集音器などのハイテ

ク満載の手のひらサイズのロボットだ。

『細かい事は気にするな。それよりここからは音声ができるぞ』

そう言われたのでイヤホンを付けると

『ヘンタイ———！』

いきなり耳元で大音量のアニメ声が聞こえた。

しばらく耳がキーンとなり、やっと治ったと思ったら

『アリアを、守る』

今度はいつものキンジとは違うクールな口調に聞こえた。

ヒステリアモードになっているな。そこからは圧巻だった。

ズガガガガガガンツ！！

先程のUZI付きのセグウェイ7台の射撃を上体を大きく反らしてかわし、一瞬で片付けた。

「あつという間だったな。さっきまでの同一人物とは思えんな」

あの銃技、あの佇まい。

まさしくあの時俺を倒したSランクの実力だ。

まあ油断してたからな。

ここ重要。

だがあいつ、武偵を辞めようとしてんだよな・・・

映像ではキンジがアリアを小学生と間違えて、アリアがキレていた。キンジはアリアのガバメント、バリツ、小太刀を連続で躲けている。

最後はキンジがアリアから盗った銃弾を地面に撒き、それをアリアが踏んでコケているうちにキンジは逃げていた。

映像の最後には、アリアの捨て台詞が記憶されていた。

『この卑怯者！でっかい風穴——あけてやるんだからあ！』

そこで映像は終了した。

「始業式している間にこんな派手なことしてたんだな」

『キンジの野郎・・・、ヒスるようなことして、弄んで逃げやがった・・・、潰すか』

弄んではいないだろと思いつつ、俺はある疑問が浮かんた。

「チャリジャックまでは今までの《武偵殺し》の手口と同じだが・・・」

『どうした、御行？』

「チャリ爆破後の体育倉庫での戦闘だ。殺すのが目的なら、爆弾付きのセグウェイでも突っ込ませればいい。だがわざわざ7台のUZI付きセグウェイで襲撃している」

『なるほどな』

「だがその理由が分からん」

殺しが目的じゃないとしたら別の目的があつたのか？

「少なくとも《E》の奴らならそんならいやってるな」

『その《E》だが・・・ビンゴだったぞ』

その一言で御行の目が鋭くなる。

「昨日のはやはり《E》か・・・、本格的に動き出したか・・・！」
いつの間にか拳を強く握りしめていた。

「この学校に来て1年、やっと本来の目的、《E》を・・・」
ばん！

その時いきなりドアが開いた。

そこにいたのは先程までパソコンで見ていた神崎・H・アリアと、
昨日事件で危機にあった逢月アルドラーゼだった。

「先生、今の話詳しく聞かせて下さい！！」

2 時間目 考察（後書き）

ジューダス『戦闘が全然ないな』

YAKT『すまん。当分戦闘できるか分らん』

ジ『俺の活躍はまだ先か？』

Y『ハッキングとか《シャドー》の操作とかしてんじゃん』

ジ『そんなもん小さい事だ』

Y『・・・次アリアと会えるぞ』

ジ『よし許す』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9554v/>

緋弾のARIA —純色の鎧を纏いし者—

2011年10月9日15時38分発行